

# 在るしかない

竹山広（全歌集）と山田かん詩集「長崎碇泊所」

中里 喜昭

昨年暮近く刊行の『竹山広「全歌集」』を前後にはさみ、山田かん『長崎原爆・論集』、山田かん詩集『長崎碇泊所にて』とあいついで三著が出された。いずれもこのところの画期といえよう。

破裂管の水涸るるなしわが裡になきがらひとつ濡らしつづけて  
迷ひふかき人間は深夜起き出でて大いなる昆虫凶鑑をひらく  
旨きものを食ひて太りて子の児らは地球より先に死ぬやうにせよ

社会主義革命の旗をおろしたる共産党の涙ぐましも

竹山広と山田かんには十年ほどの年齢差がある。だが、こんど両者を読み通して、自己の老いへの凝視、世界と身辺への巨視と微視、子どもを見る目、はては人一倍の好奇心など、よくもこう似通っているものだと思った。日常的な心情から思想へと間断なく上昇する感性までが共通している。前掲の詠草には、たちどころに山田の「肉の大きさ」、「写された魚」、「またも還らずああ遂にまた」他の詩が対置できる。定型叙情詩であるか否とにかかわ

らず、歌集と詩集に打つプルの波長が同じなのである。山田の「走る女」のような言語形象は、これまでもいわゆる現代詩でよく用いられる表現だった。だが、その詩法は短歌でも中城ふみ子や「女人短歌」に拠る人びとなど、主に戦後の女性歌人たちによっていちはやく採り入れられ、いまでは（ブランコが赤い服着た児を連れて空を旅する風の公園・高橋栄美子）（NHK歌壇）〇一年十二月号佳作）のように広くみられる詠法となった。戦後、観念的であれ自己表現の一方向として定着している。竹山広の即物的で手堅い詠いぶりは、たぶん茂吉から学びとられたのだろう。二句切れの、たたみかける節調を多用した茂吉と違い、三句切れないし句割の歌が多いのは竹山作品の生理であり、茂吉より地味な抑えた詠いぐちをみせる。ところが、（みづからが選びて生くる一生の身のほどほどの卓上の皿）（午後の日の残れる椅子にゆきて座る遅れてきたるたましひのため）をみると、彼は一群の女人歌や山田らの表現のすぐ隣に立っているのがわかる。とりわけ全歌集の最新の歌集「射祷」をみれば、竹山がいかに油断のならぬ歌人であるかよくわかる。結核と原爆のためたびたび死にかけた、弱々しげな外見とちがいが、彼はまずもって強靱な生活者であり、ときに生臭く奔放でさえある。伝統詩型を蠣殻のようによろつつ、生命の豊穡をしぶとく生きる曲者だ。

竹山広と山田かんとはちがう。カトリックとプロテスタントはもとより違い、生活の細部にいたって当然にもまさに別人である。それがたいつい似通ってしまうのは、両者に通底する戦後認識による。

GHQによるCCD (Civil Censorship Detachment 民間検閲支隊) 検閲業務が、日本の戦後文学の方向づけを意識して行われたことは、横手一彦『被占領下の文学に関する基礎的研究』(武蔵野書房刊)に詳しい。これは今年三月の第二回原爆文学研究会での服部康喜報告「アメリカ占領下におけるプロテスタントキリスト者の原爆意識」とともに興味ぶかい。

賀川豊彦の持論である、「キリスト教を根付かせることによる日本の民主化」は、GHQによる占領政策の秘めたるミッシェンでもあった。現在、日本が行っている世界百六十カ国の開発途上国援助ODAの総額をはるかに超える、こんにち換算で年間約二兆円もの無償援助を、日本ただ一国へ注ぎ込んだガリオア資金(第二次世界大戦後の米政府による占領地域救済政府基金による援助物資)とエロア資金(占領地経済復興資金)。アメリカとカナダ、中南米のNGOララ (Licensed Agencies for Relief of Asia 公認アジア救済連盟) によるララ物資は換算不能なくらい膨大な量にのぼり、長崎ではプロテスタントの手で市民へもたらされた。このほかに米軍による放出物資の配給があり、食糧欠乏のおり食べ盛りの子どもだった私は、主食の代わりにトマトケチャップを食って数日しのいだ記憶がある。また、荒廃した戦後ヨーロッパ救済のため設立されたNGOケア (Cooperative for Assistance and Relief Everywhere) が、日本での救済活動を一九四八年から始めており、約千五百万人の日本人に食料品や菓子、日用品などが手渡されている。ユニセフ (UNICEF 国連児童基金) による資金援助があり、一九五二年からはフルブライト留学制度により、約六五〇〇

名の大学生がアメリカへ渡った。

ガリオア資金は、アメリカの軍事予算から旧敵国支援のため設立されたものであり、GHQなら当然、東西冷戦構造下の日本での陣取りに援助の意味を見いだしていたろう。個々のNGOの支援目的は、もちろんそれと同じではない。だが、飢餓に燃える一団の火だったわれわれは、個々の援助の目的などいちいち吟味しつつ受取る余裕などなかった。被爆者である私の父はつねづね「アメリカさんとアーメンさんに足向けちや寝れん」と言っていたが、彼だけでなく日本人の多くも、自分たちにもたらされた国際的な手厚い援助を、一律に気前の良いアメリカの贈り物と受取っていたらう。この事実が被爆地長崎にアメリカ憎しの市民感情を醸成しなかった一因だとする先述の服部康喜報告は、十分な説得力がある。それは長崎市民だけでなく、アメリカ世が永い沖繩および米基地による侵害がひどい地域をのぞけば、広島市民もふくむ多くの日本人の心象でもあったらう。にもかかわらず、怒りの広島・祈りの長崎といった皮相な類推はいまでもまかりとおっているらしい。そこから双方の市民の質を云々する。怒ろうが祈ろうがいつこうかまわれない。そんなことより、広島、長崎を含む当時の日本のどこでも、アメリカ好きが圧倒的多数派でありアメリカ憎しは少数派だったという事実こそ、この本質をものがたっている。歴史区分としての戦後を理解するためにも、個々の原爆表現のヒンターランドをはつきり見渡すためにも。

大東亜共栄圏の盟主だとか八紘一宇だとかの呪縛から逃れることができた日本人は、当然、国家や民族主義への過度の集中をおそれた。そこまではよかったが、アメリカを中心とした潤沢な援

助と多額の戦時補償の踏み倒し、朝鮮・ベトナム戦争の米軍兵站として整備されたおかげで、経済の高度成長がはじまり、腐った水にボーフラがわくような飽食社会が出現した。いっぽう戦時国家の統帥権を発揮した天皇は戦争責任の追及どころか退位さえせず、戦前・戦中・戦後を生き長らえた。昔と今で、精神文化の基層にあるものがそれほど変わったとは思えないのに、日本人の多くは「国家」や「民族」という戦時体制の憑依から遠ざかり、分散し、いまや「砂のような日常」まるごと企業や国家に統治されている。(抜き取りし本の値段を見て戻すわれを東京のカメラ監視す)と、竹山広は監視カメラを逆手に管理社会の現場をするべく写しとっていた。

占領軍による日本人の意識操作は、戦争と原爆関係の出版を問答無用に弾圧した時期を過ぎると微妙に変化していく。

一九四八年と翌年、永井隆『この子を残して』と『長崎の鐘』が出される。ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』によれば、原爆を燔祭の炎と説く永井のメッセージは宗教的神秘論に近かったが、しかし、永井が日本人の平和への願いを高めたことは誰も否定できなかった。永井の文章は感情に流れやすく、メロドラマの殉教者のようだし、原爆体験から時間もたっている。そのころ、東京裁判において勝者による日本人への判決が出ようとしていた。(こうしたことが、そのころ強まりつつあった日本人の犠牲者意識の内容に影響を与えたのである)。戦争そのものが「犠牲を生んだ張本人」だ、日本人は現代戦のもっとも典型的な犠牲者だ、とされ、聖人・永井は、日本人の意識を強める新しいシンボルとして現れた。センチメンタルな軍歌の作曲家古関裕而が、映

画「長崎の鐘」のテーマ音楽を作曲したのは、こうした状況を考えれば、なんら不思議ではない……。こうしてダワーは、太宰治『斜陽』、ドフトエフスキー『罪と罰』の翻訳と共に『長崎の鐘』を、当時の日本人の犠牲者意識を高めた三冊の本としてあげる。

戦後五十七年たったいまでは、被爆地の市民意識と占領政策とのかかわりを、しかるべきスタンスから見渡すことが容易である。だが、竹山広と山田かんとは当時から現在まで、つねに醒めた表現者だった。「メロドラマの殉教者」とダワーが評したように、永井の小説やエッセイは神とか燔祭とか語彙が崇高なわりに表現は俗っぽく、脂手で撫でられたような読後感がつきまとう。同じカトリックに属するキリスト者の竹山には、直接永井を評する文章はないが、もともと短歌以外に多く語るを潔しとしない作家である。だが、永井の(天皇は神にまされば 私の本を読みしとじかに申し給う)(原子雲の下に生きのびし 親子三人天皇に笑顔を見せ参らすも)といった一連の天皇讃迎歌と、竹山の(すめろぎの民の思ひにいま遠く立ち待てる間のただ寒きかな)(現つ神にあらず人民にまたあらず機関車二輛みがきつらねて)(大君とその数ならぬ民の思ひ追はるごとくわれの断ちしか)の一連とはまさに対極にある。アメリカとも天皇とも親しかった「浦上の聖者」にたいし、竹山には(戦ひし日より憎きアメリカと思ふくらがりを帰りにけり)がある。

山田は、詩作とともに評論に力を入れてきた。詩集のほか、エッセイやコラムを収めた評論集を独自に出しているし、双方を同

時に収めた『記憶の固執』もある。詩集『長崎碇泊所にて』は詩作活動の独立した達成だが、これに先立つ『長崎原爆・論集』とを併読すれば、彼の詩をより広い空間に俯瞰できる。しかし、新聞はじめジャーナリズムはもっぱら彼の尖鋭な物言いに注目し、核大国の核実験時や毎年八月六日・九日の原爆記念イベントにのぞんでの格好のコメンテーターとして彼を「利用」してきた。じつ、新聞やテレビの期待どおり彼は状況へ正確に刺さる発言をしたし、底の浅いカンパニアと知りつつ反核サークルの機関誌などの需めにも辛抱強く応じてきた。その結果、山田の内部に埃のように降り積もった疲労や無力感などには、だれも注意を払っていない。まして、やけに冷えこむ夕暮れ（こんなときは／おうどんのたべたかねエ（おうどん））とひびく少女の透明な声を聞きとめた詩など、正面から評価することも少ない。山田の本来は詩人であり、『長崎碇泊所にて』はその最新の達成である。

新世紀へ至る十年ほど前から、世界と日本の戦後史は大きく転回し、傾きはじめた。ソ連と、ソ連を中核とした社会主義世界体制が崩壊した。八月六日・九日に旗差物をふりかざして行進する〈炎天下社会党 炎天下共産党〉も急速に影が薄くなった。ニューヨークの貿易センタービルへのテロは、パクス・アメリカーナの綻びと同時に、テロリストの背中を押す闇の巨大さをも映し出

した。地球環境破壊。環境難民。食糧不足と人口増大。環境汚染。核だけでなく、どの問題もそれぞれが人類滅亡への十分な可能性をはらんでいる。核戦争阻止に集中できた過去とちがいで、二十一世紀はこれらののっぴきならない危機の複合をもって特徴づけられよう。社会主義革命の旗をおろした炎天下革命党こそまさに涙ぐましいかぎりだが、それ自身また一年先さえ見えない政治の闇の一部を構成している。そうこうしているうち、へいつしか老いが正面立ちにきてしまった／地軸が何十回となく正確に公転したから／おれのせいではないが生理の所為だ（残りの夏）。こうした山田かんの焦りや不安は、竹山の「射撃」と共振して読む者を打つ。山田の場合、もう一つ負担になるのは、地軸の公転や生理の所為ではなく、まさに病理の所為で肺と胃を撃ち抜かれていくことだ。

一八二五年のデカブリストたちには、まだしも希望があった。いまや日暮れて道遠し。いや、闇に充ち満ちながら道などないのが二十一世紀こんにちただいまの現実にはほかならない。闇を透視し続ける表現者も、「智慧の悲しみ」を悲しみつつ在るほかに、いま生きるすべはないのだ。在るしかない。これをしもペシミズムというなら、毒をきかせた現代の詩の食卓につく資格はだれにもない。